
もう少し

冴島岐之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう少し

【Nコード】
N9962C

【作者名】
冴島岐之

【あらすじ】
こうなるとわかっていたら、選ばなかった、彼の手だけは。性的描写はありませんが、若干大人向けです。

砕いた希望と、眠れなかった夜の時間を、返してほしい。
そうしたら、もう少し幸せだったろうから。

「なめてよ」

そういわれたのは今からほんの十分前のこと。
奴は下着とキャミソール一枚の私にそういった。濡れるのが好き、だから、なめろっていうらしい。唇、首、胸、場所はいろいろいる。
なめるときは舌を出せと怒る。

「もういい、ベロ」

体中なめてまわる私に、奴は微笑む。私はベッドに腰かけていた奴の足の骨を辿るようになめていたけれど、膝立ちになった。
私は奴の顔の前で舌を出す。観察するようじつと、舌と、目を見られて、包み込むようにねっとりとなめまわされた。

こんなキスは、普通じゃないと思う。私はキスだと思えない。前の人とはそれだけで体が熱くなってベッドに誘いこまれたけど、こんなにじつと見られたりしなかった。だけど奴はじつと、獲物を狩る肉食獣のようじつと、なめる。だから私もじつと見つめ返して、なめる。

味わうっていうのは、こういうことをいうのかもしれない。満足したのか、奴は私から離れた。濡れるのは好きでも、触れ合うのは

嫌い、抱き合うのも嫌い。変わってると思う。

こんなに裸に近い状態で見つめあっても、セックスする訳じゃない。

「昨日も探しに来てたよ、彼氏」

「……なんて、いつてた？」

「返せだって、お前を。バカだよな、どうせ捨てるつもりなのに」
にやりと嘲笑う。その姿にぞっとした以前の私を思い出して、私も嘲笑った。

「お前は誰にもやらないよ。ずっと、ここにいればいい。逃がしはしない」

わかる？ そう問うように首を傾げ、笑みを浮かべた。

砕いた希望と、眠れなかった夜の時間を返してほしい。
そうしたら、もう少し幸せだったろうから。

「にげないよ。心配なら首輪でもつける？」

「そうだね、考えとく」

前の人は、キスが上手。とろけて、熱くなって、涙が出るくらい
幸せで、絶対この人と結婚するんだって思ってた。

私よりも前に、そう思って現実にした人がいることは、この部屋
に逃げ込んだ日に知った。

愛してるっていった。ただ、それをいう相手がもうひとりいただけだ。

「すき、」

「……」

「あいしてる」

私がそういうと、奴はものすごく嫌そうな顔をした。私はもう、何も思わない。暗い部屋の中で黒く光る瞳をただ見つめ返す。

「もう、いうな」

「なんで？」

「……軽いから。俺は、そんなもんいらねー」

温もりのない部屋と、閉じてしまった私。

出会う前に戻れないだろうか。何も壊れていなかった世界へ。

戻れたらいい。そうしたら私は『彼女がいますか』と『結婚しますか』という質問を忘れたりしない。

戻れたらいい。そうしたら私はこの部屋には来ない。帰る場所がなくとも、雨に濡れても、倒れようとも、奴には拾われない。

「……かんでもいい？」

ぼそりと呟いた。奴は嘲笑う。私は泣きながら、奴の首に噛み付いた。

痕が残ればいい、そう思った。

“
E
N
D
”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9962c/>

もう少し

2011年1月5日03時59分発行